慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	追悼 鶴木眞先生 : 追悼の辞
Sub Title	
Author	大石, 裕(Oishi, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2016
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.66 (2016. 3) ,p.125- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20160300-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

追悼の辞

大石　裕

1975 年に法学部政治学科に入学した私は，翌 76 年に鶴木眞研究会に所属することになった。当時，政治学科の研究会は 2 年次から開講されていた。留学帰りの鶴木先生は，『日系アメリカ人』（講談社現代新書，1976 年）を出版した。日米社会の境界の中で様々な葛藤を経験しながら，社会的上昇を果たした日系アメリカ人に関する留学中の研究成果がこの本であった。その影響もあり，研究会で輪読していたのは，マス・コミュニケーション，ジャーナリズム関連ではなく，主にアイデンティティ，あるいは政治的社会化に関する文献であった。そのことに不満を持った私は，その思いを先生にぶつけてみたが，軽くいなされ，聞き入れられることはなかった。代わりに，自主ゼミで，要するにゼミ生だけでジャーナリズムの本を読むことをすすめられた。

今思うと，この対応の中に鶴木先生の教育者，研究者としての姿勢が凝縮されていた。当時の日本のジャーナリズム論の主流は，ニュースの生産過程を研究するというよりも，新聞やテレビを批判することが中心であった。商業主義と記者クラブに対する批判ばかりと言っても過言ではなかった。優れたジャーナリズム機能を有する（と思われていた），ニューヨーク・タイムズや BBC などと比較し，日本のジャーナリズムの現状を嘆くというのが常套手段であった。ジャーナリズム論のそうした状況を横目にしながら，「この種の，あるいはこのレベルの本は，研究会で読む必要はない，読むべきではない」と先生は考えていたのであろう。たんなる批判を行うことにとどまらず，そうした状況が継続してきた要因に関して，体系だった思想，理論を用いて経験的に分析する，それが研究だというメッセージを先生は発していた。

しかし，そのことだけでは鶴木先生の一面しか見ていないとも言える。先生は面白いと思ったテーマを見つけると，それに向かって直線的に向かう研究者であった。しかも，関心は一か所にとどまらない。多くの海外経験を積むことで，国際社会にその眼は向けられていた。世界の火薬庫と言われた（言われる）中東地域，鶴木先生はイスラエルに二度留学し，現地調査を行っている。社会的コミュニケーションという，まさに「広義の」コミュニケーションの観点から，その歴史も含めイスラエル社会の分析を行い，その成果は『パレスチナとアラブ人』（慶應義塾大学出版会，1981 年），『パレスチナ問題入門』（TBS ブリタニカ，1982 年）として結実した。その後も先生は，東南アジアや南米などで精力的にフィールド調査を行い続けた。その当時の先生の関心は，内向き，かつ国際情勢を固定的な視点で報道する日本のメディアやジャーナリズムにはなかった。

先生はその後，慶應義塾大学を離れ，東京大学，十文字学園女子大学（学長），松山大学に勤務することになった。学会関連の活動としては，日本マス・コミュニケーション学会と警察政策学会で会長を務められた。そうした激務の合間を縫って，社会的コミュニケーション，そして国際コミュニケーションの観点から執筆した論文をまとめられ，『情報政治学』（三嶺書房，2002 年）を刊行し，この本によって博士学位（法学，慶應義塾大学）を取得された。

鶴木先生とは 40 年近く，公私にわたって「濃密」なお付き合いをさせていただいた。しかし，前述したフィールド調査をはじめ，先生と共同研究を行う機会は実はそれほど多くなかった。様々な局面で厳しい助言をいただくことはあったが，私の「研究・学問の自由」は完全に認めて下さっていた。私が権力論や社会運動論に関心を抱いても，じっと見守ってくださった。私が本を出版するたびに「頑張ったね」という言葉をくださり，役職に就くと心からお祝いして下さった。本当に思い出は尽きない。先生と何度もご一緒させていただいた有楽町のレストランで牡蠣を食べ，ワインを飲んでいると，あの笑顔がふと浮かんでくる。鶴木先生，ありがとうございました。

大石　裕（慶應義塾大学法学部教授）